

傷物令嬢の七度目の婚約

Characters

ローズ

ド・モンソー侯爵家の令嬢。
軍医だった前世を持ち、
今も医師の資格を持っている
何かと規格外の令嬢。
背中に刀傷があることから
傷物令嬢と揶揄されている。

フェルディナン

ドゥワンドール公爵の次男で
優秀で誠実な若き將軍。
ローズの七人目の婚約者。
ローズを大切にしつつも
叶わぬ想い人がいたそうで……？

リカルド

ローズの元上司の
帝国近衛騎士団長。
ローズの過去を知っていて
何かと気にかけている。

ヴィクトワール

フェルディナンの母親。
かつて、中傷されていた
ローズを助けてくれた
正義感の強い公爵夫人。

マクシミリアン

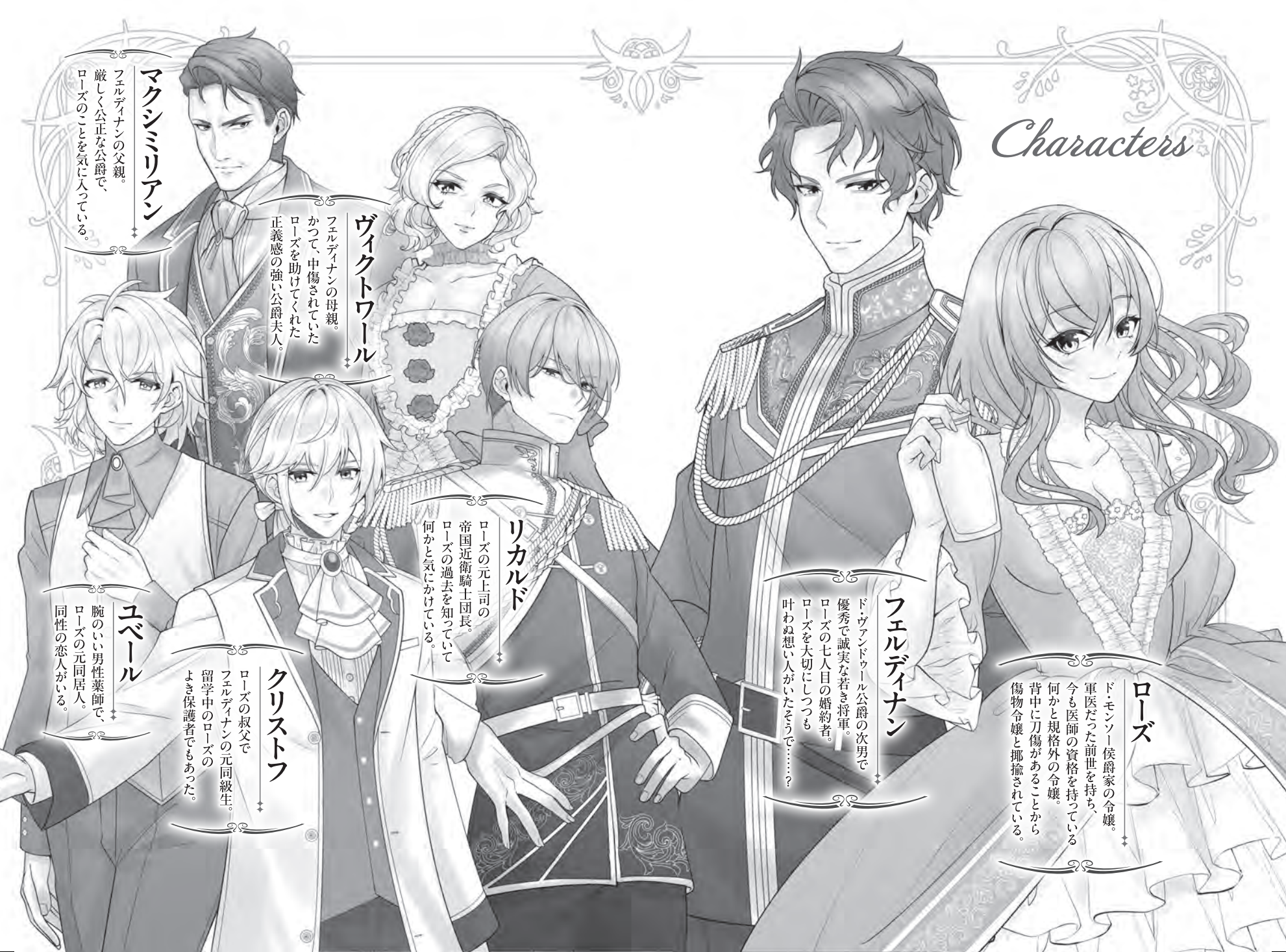
フェルディナンの父親。
厳しく公正な公爵で、
ローズのことを気に入っている。

クリストフ

ローズの叔父で
フェルディナンの元同級生。
留学中のローズの
よき保護者でもあった。

ユベール

腕のいい男性薬師で
ローズの元同居人。
同性の恋人がいる。



第一章

祝祭の夜。デビュタントを迎える令嬢たちのはやる胸の鼓動が、華やかなホールを満たしている。最前列に立つ私は、背中に走る痛みを抱えながら、ただ静かに扉の向こうを見据えていた。

——前世の想いを胸に、守られるだけの存在にはならない。そう心に誓って。

(傷物令嬢？ 公爵の力で先頭に？)

雨の気配に混じって、そんな声が聞こえてきた。背中の中傷が、鈍く疼く。四年前、真剣で負った傷痕だ。

「くだらない。ローズ、気にするなよ？」

「ふふつ。若いご令嬢は扇子で口元を隠さないから、陰口も筒抜けですね」

聞き慣れた言葉だ。表情ひとつ動かさず、聞き流す術も身につけた。アステリア王国の社交界は、四年前から何ひとつ変わっていない。

ファンファーレが鳴り、静まり返った会場に、格式と伝統を纏った式部官の声が響き渡る。

——レディ・ローズ・ド・モンソー、ド・モンソー侯爵家令嬢。叔父君、特命全権公使ド・プラーヌ公爵閣下のご紹介を賜り、今宵、社交界にご参入あそばされます。どうぞ、盛大なる拍手でお迎

えください。

「よし、行くか」

「はー」

胸元の曲線を凛と際立たせ、軽く顎を引き、静かに前を見つめて会場への入口をくぐる。

その瞬間、天井から降り注ぐシャンデリアの瞬きが、新しい世界への門出を告げるように輝いた。一歩踏み出すたびにシフォンの柔らかな裾が優しく波打ち、遠い前世の記憶がそっと蘇ってくる。

——リョウと結婚式のリハーサルをしたあの日。窓越しに朝陽の祝福を受けながら、二人の歩みは自然と揃っていた。

寄せては返す、穏やかな波音。そこはかとなく漂う、素朴な野花の香り。

その記憶が思い起こされた瞬間、煌めく王宮がああパーズロードへと姿を変えた。けれど会場の中央に差しかかる手前で、温かな記憶はふつりと途切れた。

——あの時と、同じように。

(あれが噂の？ フローランス夫人が愛人との間にもうけた娘らしいわ)

(どうりで。一人だけ毛色が異なるわけね)

鋭いささやきが耳を打った時に、心に沈めた澱が静かに揺れる。

けれど、穏やかな微笑みを浮かべることは忘れない。

私は、人より耳が利く。読唇術に加えて軍隊生活で身につけた技術だ。

——傷物令嬢。

社交界では、数々の蔑称が私につきまとう。

黄金の髪と青みがかかった鮮やかな緑の瞳を持つ姉妹たちに比べ、私の琥珀色の髪と薄紫の瞳は異質に映る。その理由を知る者は、ほんの一握りしかない。

「ごめんなさい、クリス兄様。悪目立ちしちゃって」

微笑みを湛えたまま謝ると、前を向いたままのクリス兄様が、「気にしなくていい」と言葉を返した。ゆつくり会場を見回しながら、少しだけ口元を緩め、「まあ、目立っているのは事実だな。着飾ったローズは、『アステリアの真珠』と謳われる姉さん以上だから」と続けた。

クリス兄様は、母の親子ほど年の離れた弟だ。実際には叔父だけれど、感覚的には兄に近い。

「それにしても、エスコートは普通、婚約者の役目だろう？　まさか、今回も？」

「六回目の婚約破棄も時間の問題みたい。婚約者様は、真実の愛のお相手でお忙しいのですって」

昨夜、父は達成感を滲ませつつこう宣言した。

『有力貴族からの婚約の申込みはすべて受けた。もうこれ以上、我が家が無駄な覇権争いに巻き込まれることはないだろう』と。

「まったく。十六歳にして六回の婚約破棄って……娘の幸せをなんだと思ってるんだ」

「私を心から愛してくれる男性を見極めるための、試金石ですって」

私の背中には、十五センチにも及ぶ刀傷の痕がある。真に娘を愛する男ならば、婚約破棄の回数や背中傷など取るに足らぬ問題と考えるに違いない、というのが両親の持論だ。父は今頃、冷笑を浮かべながら相手方の有責による婚約破棄の書類を揃えていることだろう。

ダンスを告げる華やかな音楽が鳴り響くと、婚約者デヴィッドの父親から声をかけられた。「うちの愚息を探してきてくれないかい？」

婚約者の父の最後になるだろう願いに頷き、侍女兼護衛役のサラを伴い彼を探しに行くことにした。行先は、東回廊の端にあるシガールームだ。

少しだけ開いたドアの隙間から中を覗いた瞬間、甘ったるい香りと笑い声、淀んだ空気が漏れてきた。舞踏の間に漂う、神聖で張り詰めた緊張感とはまるで違う。煙草とお酒の匂いが混じり、霞んだ空間はどこか気安い雰囲気放つ。そこには、デヴィッドと友人たち、そして珊瑚色の髪を揺らす小柄な令嬢の姿があった。

サラに向かって人差し指を唇に当てると、身を隠して耳を澄ました。

私の直感が正しければ、デヴィッドは自ら口を滑らせるはず……

「デヴィッド！　お前の婚約者、すごい美人じゃないか!!　醜悪令嬢だなんて誰が言ったんだ？」

「背中に酷い傷痕があるのよ？　それが原因で、第二王子の婚約者候補からも外されていたもの」

「ただの噂だろう？　見たことあるのか？」

「そうじゃないけど……学園にも通わず引き籠もっているのよ？　頭のネジは相当緩いはずだわ」

見知らぬ令嬢に好き放題言われている。おそらく彼女が、「真実の愛のお相手」なのだろう。

「引き籠もりじゃなくて、オストリッチ帝国の帝国医学校に留学していると聞いたけど？」

「はあ!?　最難関校じゃないか!!　いずれにしても玉の輿、間違いなしだな」

「なあ、やっぱり彼女、傷モノだったのか？ お前のことだ、相性は試し済みなんだろう？」
 「そんなわけないだろう!? 五度も婚約破棄された売れ残りを押しつけられて、最悪な気分だ」
 心底嫌そうに答えたデヴィッドに、「それで尻軽令嬢ってわけか」「ああ見えて、惚れやすいんだな」
 「いや、どちらかというと高潔な感じがしたけどな」などと、友人たちが勝手な解釈をし始める。
 「高潔？ 横柄なだけじゃない！ デヴィッド様、安心なさって？ 今夜も私が癒してあげる」
 「だったらマリイ。いつもの休憩室で待っていてくれ。今夜も、君に癒されたい」
 ほらね。

言質は取れたと後ろに控えていたサラに目で合図を送ると、彼女は心得たとばかりに頷き、父のもへと戻っていった。

「皆さま、歓談中に失礼いたします」

そう声をかけると、皆の視線が一斉に集まった。デヴィッドの顔が一瞬で強張る。

「お初にお目にかかります。ブルドウン伯爵家のマチアス様、リオンデル伯爵家の……デラメール男爵家のマリイ様。ローズ・ド・モンソーでございます」

父親譲りの悪人顔で、(皆さんのお顔と家名は覚えましてよ) と無言の圧力を加えると、緩み切った空気がぐつと硬くなった。直前にサラがデヴィッドの友人情報を耳打ちしてくれたおかげだ。

「デヴィッド様、安心なさって？」

マリイの声色を真似て言うと、デヴィッドの肩が三ミリ跳ねた。

「お望みどおり、明日には他人になりますわ」

——それでは ゲスナ ミナサマ ゴキゲンヨウ、エイエンニ。

最後にオストリッチ語の俗語を言い放ち、その場を後にする。

なぜか焦った様子のデヴィッドが追いかけてくるが、構わず歩いていると回廊を警備していた近衛兵たちの動きが急に慌ただしくなった。訓練により磨かれた聴覚で言葉を拾う。

「要救護者、一名確認。救護班を要請する」

「急病人の発生ですか？ 私は医師見習いです。先生方が到着するまで対応を」

「助かる！ 場所はシガールームだ」

一目散に先ほどの場所まで戻ると、シガールームを支配する雰囲気が一変していた。

仰向けに倒れたマリイの髪が大理石の床に広がり、白い肌は青磁のように生気を失っていた。周囲の男性陣は誰も手を伸ばさず、ただ肩をすくめて後ずさり、視線を宙に泳がせている。マリイがクロスを引きずったのか、琥珀色をした木のテーブルが半分露わになり、倒れた花瓶から溢れた水がポタリ、ポタリと床に染みを広げていく。その音が、異様な静けさを引き立たせていた。

「救護班が到着するまで応急手当をします。何があつたか簡潔に説明を！」

声を張ると、男性陣の表情が一斉に引き締まった。

「マ、マリイがそこにあつたグラスを一気に飲んだと思ったら、いきなり倒れたんだ」

「毒——ではない、な。どうやら、令嬢が蒸留酒を呷あおったらしい」

倒れたマリイのすぐそばで様子を見ていた近衛兵が、グラスを私に手渡しながらそう告げた。強力なアルコールの匂いが鼻を刺す。



マリーは普段から飲酒しているのか尋ねると、少なくとも彼らは見たことがないという。「急性アルコール中毒の可能性が高い。マチアス様、マリー様の身体を横向きにしてください」「わ、分かった。どうか？」

「そう、顔が横を向くように。吐瀉物^{としゃりょう}が気道を塞いで窒息死するのを防ぐためです。それから、騎士様。テーブルクロスで周りを囲ってください。彼女の名誉のためです、急いで」

広げられた厚い布が空間を遮断^{しだんだん}すると、たちまち即席の救護所へと様変わりした。

マリーの名を呼びながら、頭部打撲の有無、瞳孔^{どうこう}の反応、呼吸の浅さ、皮膚の冷えなどを次々と確認していく。これまで何度も繰り返してきた処置だけれど、デヴィッドの友人たちには異様に映るのか、固唾^{かたず}を呑んで見守るばかりだった。

ただ一人、近衛兵だけは違った。冷静な面持ちで私の手元を追い、必要な時は即座に動けるように構えている。

「頭部外傷なし。意識レベル、十二」

コルセットを緩めると、マリーの身体がびくりと反応して嘔吐^{おうと}した。

思わず顔を背けた男性陣に、救護班が到着したら彼女の身元と経緯を告げるように伝え、部屋の外の待機を指示する。

「空気を入れ替えるか？ 彼女もその方が楽になるはずだ」

落ち着いた声で問いかける近衛兵に頷くも、あいにくこの部屋に窓は見当たらない。いったいどう思っているのかと思っていたら、彼はすぐに動いた。

まさか、あの高さにある天窓を？

彼は長い腕をすつと伸ばすと、力強く銃を外した。その仕草には微塵の無駄もない。軋む音とともに天窓が開いた。

一気に冷たい夜気が流れ込み、淀んだ匂いと煙った重い空気を押し出していく。

「——寒くはないか？」

彼は私の肩に視線を留めるなり、静かにそう尋ねた。その瞬間、胸の奥で別の声が重なった。

男性社会である軍隊で、女性には同等の強さが求められた。そんな中でリヨウだけは、私を特別扱いしてくれた。甘やかすのとは別の、気遣い。「寒くないか」と上着をかけてくれた、あの温もり。

近衛兵の気遣いに、私はまぶたを伏せて首を横に振る。

甘えてばかりだったから。守られてばかりだったから。

だからリヨウを——

胸の奥に沈んだ後悔が、今も私を縛っている。

その時、ようやく駆けつけてきた医師が、マリーを診察しながら私の報告を受け取った。

「医師見習いのローズです。おそらく蒸留酒の一气飲みに起因する急性アルコール中毒で——」

「完璧な初動に感謝します。あとはこちらで対処いたします」

マリーが救護班に運ばれていくと、誰もいなくなった部屋は水を打ったように静かになった。

……とんだ一日だった。

六回目の婚約破棄は想定内として、このドレスはもう着られそうにない。

急に疲れが押し寄せてきて椅子に腰かけると、磨かれたガラス面に、心の曇りが滲み出した自分の顔が映っていた。

「せっかく綺麗な生花を挿してもらったのに」

無様に潰れてしまったデビュタントの印である白色のカーネーションを髪から抜き取る。テープルの上に置かれたクリスタルの水差しを手に取り、ハンカチに水を含ませて裾の汚れを落とすことにした。くしゃりと萎れた花を見ると、胸の奥がきゅつと痛んだ。白い花卉が、再び遠い記憶を呼び覚ます。

——私は、前世の記憶を持っている。背中に刀傷を負った瞬間、すべてが蘇った。

リヨウと私は、偶然同じ日に生まれ、同じ街で育った幼馴染だった。

高校生の文化祭の夜。

フォークダンスの輪から私を連れ出したリヨウが、背中から白いカーネーションを差し出した。

はにかんだ笑顔とともに渡されたその一輪がきゅつかけで、私たちは付き合うようになった。

医学校を卒業した日の午後。

校門で待っていた彼の腕には、大輪の百合が抱えられていた。まるで一緒に歩む未来の扉を開く合図のように思えて、すごく嬉しかった。

プロポーズを受けた夕暮れ。

白を基調とした軍の正装に身を包んだ彼が、私に誓ってくれた。

——生涯をかけて守るよ。

夕陽を頬に受けながら彼が照れくさそうにささやいた声が、今も心に刻まれている。

そして、結婚式のリハーサルを行ったあの朝。

リヨウは、白の胡蝶蘭こちょうらんを私の髪に挿してくれた。歩幅なんて意識しなくても、私たちはあうんの呼吸でなんでも理解し合えた。バージロードの先に幸せな未来が続いていると、信じて疑わなかった。死ぬ時でさえ一緒だと、そう、本気で思っていた。なのに——

その誓いが実を結ぶ数日前。彼は人命救助の任務中に起きた二次災害に巻き込まれ、帰らぬ人となった。リヨウの死亡確認をしたのは、同じ軍隊に所属していた医師——前世の私だった。

被害者を庇って亡くなった彼の全身は傷だらけだったのに、顔だけは眠っているように穏やかだった。彼の同僚が唇を噛みながら、震える声で「最期のお別れを」と私に告げた時の絶望。彼に口づけを落とした時の、命の灯火が消えたことを伝える冷たい静寂。魂の片割れを失った喪失感は今も胸の奥に重たい空洞として残っている。

リヨウは、私を守ってくれると言ったけれど、私は、守られるだけの存在にはなりたくない。

そして、もし叶うのであれば——今世こそ、幸せな花嫁になりたい。

——でも現実には、そう甘くはないみたい。

「ふう……」

普段は勝気に見られがちな瞳が涙で揺れるのを、長い睫毛まげで覆い隠そうとしたその時。

「大丈夫か？」

不意に、テーブルクロスで救護現場を囲っていた近衛兵から声をかけられた。どこから用意したのか、真新しい毛布を手渡してくれる。

防具の頬当てを着けているため表情までは分からないけれど、彼の深く澄んだ碧色あおの瞳には私を氣遣う温もりが灯っていた。その眼差しに安心感を抱くのはどうしてだろう。

お礼を伝えると、「相手があんなでも助けるんだな」と言われた。

「政略的な婚約とはいえ、恋仲の二人の間に割って入ったのは事実ですから」と返事をしたら、くつくつと笑いながら、「肝の据わったご令嬢だ。とても社交界デビューを迎えたばかりの女性とは思えない」と、眩しそうに目を細めた。

「それに、出していた指示も的確だった」

「名指しする方が効果的なんです。特に、ああいう現場では」

「ほおう。知ってやってやっていたのか。混乱した場であそこまで冷静に動ける人間は珍しい。たとえば、訓練を受けている我々のような者であったとしても」

だって、前世は軍医だったもの。中身は二十七歳の成人女性だし。

まさかそう言うわけにもいかず、曖昧あいまいに微笑んでいたら——彼はまるで敬意を示すかのように、眉端をわずかに引き締めた。その瞬間、リヨウも同じように仕事中の私を眺めていたことを思い出し、心臓がトクンと音を立てる。

彼はテーブルの花から一輪を選び取ると、慎重な手つきで私の横髪に挿してくれた。

「社交界デビュー、おめでとうございます。レディ・ローズ」

低く落ち着いた声が、夜気で冷えた空間に一滴の温かみを加えた。

「どうして、名前を……」

片膝を曲げて恭しく礼のポーズを取った男性からお祝いの言葉をかけられて、不覚にもたじろいでしまった。一本の白薔薇が意味する花言葉は——一目惚れ。

まさか……ね。

偶然だと思っけれど、騎士としての礼を込めたその仕草に、鼓動がひときわ強く脈打った。

こうして初対面の近衛兵との会話に不思議と心が晴れた私は、そのまま王宮を後にすることにした。庭園が見渡せる外回廊に出ると、冷たい風雨が頬をかすめる。

背中の古傷に鋭い痛みが走り、ほんのわずか歩みのリズムを崩した私に、彼はすぐに気づいた。

黙って赤いマントを外して、厚い布地で私の肩を包み、雨を遮るように左側に立つ。それから、「こちらの方が近道だ」と言って、人目につかない場所を選んで馬車乗り場まで送ってくれた。

半歩先を行きながら、私に歩幅を合わせてくれてるのが分かった。静かで迷いを感じさせない背中を見つめていると、安心と高鳴りが同時に胸に押し寄せた。

別れ際、改めてお礼を伝えると、吐息が耳にかかるほど自然に距離を詰めてきて、「そういえば、確かに彼らの会話には品がなかったな」と流暢な帝国語でささやいた。

まさか、帝国語で言い放ったあの捨て台詞を聞かれていたなんて——

冷えた夜気で赤らんでいた頬に、羞恥の熱が重なっていく。耳元で響いた低い声と慣れない距離感に、心臓が早鐘を打ち始める。恥ずかしさとドキドキがないまぜになり、彼と視線を合わせる勇

気もなく、逃げるように馬車へ乗り込んだ。

——かくして、デヴィッドとの婚約はその夜のうちに、彼の有責により破棄された。

それから再び留学先であるオストリッチ帝国へと戻ったけれど、まさか三年後に王命という形で帰国させられることになるうとは、この時は思ってもいなかった。

十 十 十

三年後。オストリッチ帝国の都にあるクリストフ邸の談話室にて。

「おおつ、載ってるぞ！ なになに、『医学界に彗星現わる。帝国史上、最年少で医師免許を取得した十八歳の……R!』おい、イニシャルじゃないか!! まさかローズ……取材、断ったのか!？」

鼻歌交じりに新聞を広げていたクリスマス兄様が、ぐしゃりと折り畳んでサイドテーブルへと放り投げた。

「顔を知られるのは、苦手なの」

「だからって、何も取材自体を断ることはないだろ……」

クリスマス兄様が呆れたように、肩のため息をつく。

「それよりクリスマス兄様、『王命による婚約』って、『冗談ですよ……?』」

未だに信じられない思いで、今朝届いたばかりの書簡を手渡す。

——この度、王命によりド・ヴァンドゥール公爵令息との婚約が調った。一年後の婚姻式に先立

ち、顔合わせを兼ねた婚約式を執り行うため、至急、帰国せよ。

「まったく、義兄さんは……」

クリス兄様が、額に片手を当てて天を仰いでいる。

「これ、見なかったことにできないかな……」

「王命だぞ？ 無理だろ。それに口ゼも最近……いや、とにかく無事に卒業したんだし、一度帰国するのでもいいんじゃないか？」

「お相手は公爵家よ？ また記録が更新されるだけだわ」

「今回の男は毛並みが違うだろ」とつぶやくクリス兄様に、思わず身体を乗り出して「知り合いな？」と尋ねると、「まあな。軍人だよ」と素っ気なく返された。

騎士じゃなくて軍人なんだ……だったら、あの時の彼とは別人ね。

お相手は、公爵家の次男で名をフェルディナンという。クリス兄様の説明では、二十二歳にして国防軍の東部地方を統括する副將軍の職に就いた人物らしい。「柔剛併せ持つ男だから、これまでの貴族の坊ちゃんとは違って話は合うんじゃないか」というのが、クリス兄様の見立てだ。

「ようやく自活の道筋が立ったのに」

「医学アカデミーへ編入すれば、王国の医師免許だって一年で取れるだろう？ それに実はさ、俺も帰国を打診されてんだ」

え……そんなこと、聞いていない。クリス兄様が……帰国する？

「ん？ 俺がいないと寂しいか？ そうだよな。うん、そうだろう」

「とかなんとか言ってる！ 本当は、私のお守役から解放されたいだけなんじゃありません？」

そう笑って返したけれど、胸の奥では消えない恐怖が小さく渦を巻き始めていた。クリス兄様はお気楽に見えて、案外鋭いところがある。その眼差しが私の動揺を見抜いている気がして、軽口を叩くしかなかった。

「あはっ。当たらずとも遠からずだな。俺もそろそろ、本気で奥さんを探さないとさ」

頭の後ろで腕を組みながら、悪戯いたずらつ子のようなウインクを浮かべる彼の姿に、うまく取り繕えたと安堵する。

帝国に一人留まることに、不安がないと言えば嘘になる。夏の始まりと共に十九歳の誕生日を迎えた私は、クリス兄様とアステリア王国へ帰国することを決めた。

この先で、私の新しい物語が始まるなんて、この時は夢にも思っていなかった。

十十十

帰国早々、王立医学アカデミーの最終学年に編入した。週に二日だけ勤務する診療所でのアルバイトも見つけ、ようやく王国での生活が落ち着いてきた頃、ド・ヴァンドゥール公爵令息から顔合わせを兼ねた舞踏会に招待された。

当日は、侍女たちがそれはもう気合を入れて準備を整えてくれた。

サイドを複雑に編み込み、後ろでふんわりとまとめた髪。透けるように下ろされた前髪に、柔ら

かなカーブを描く眉。そして仕上げのコーラルピンクのリップが、顔全体に華やぎを添えてくれた。クリスマス様に合格点を貰ったところで王宮へ向かい、入口で公爵令息を待つことになった。

父から送られた覚書には、こう記されている。

『身長は百九十センチ。日焼けした小麦色の肌にダークグレーの髪、コバルトブルーの瞳。軍隊生活で鍛えた立派な体躯をしているから、遠目からでもすぐに分かるはずだ』

けれど、無情にも彼と会えないまま開会時間になってしまった。

まさかの、婚約の白紙撤回!? だったら記録更新にならずに済むかしら? それとも不戦敗?

そんなことを考えていたら、馴染みのある帝国語で話しかけられた。

「ロゼ? ロゼじゃないか!」

「……リカルド団長!？」

「久しぶりだな——元気だったか? てか、着飾ると見惚れるほどの美人だな」

私の頭に手を置いたまま軽口を叩き、長身を屈めて瞳を覗き込んでくる。

目の前にいるのは、隣国オストリッチ帝国で近衛騎士団の長を務めるリカルドだ。私がまだ帝国の医学生だった頃、軍医としての臨地実習で彼の管轄下にある医務室に配属され、一年ほどお世話になった。

帝国近衛騎士団の正装で現れた今夜の彼は、誰もが顔を赤らめるほどの色気を漂わせている。けれど、家族全員が美貌の持ち主という環境で育った私には、その感覚がどうにも掴めない。

「団長も今夜の舞踏会へ?」

「ああ、仕事でな。それよか、入場しないのか?」

「婚約者候補と待ち合わせをしているのですが、まだお見えにならなくて……」

「婚約者候補? 王命で婚約したんじゃないかったのか?」

「いろいろと事情がありまして……」

実は私が、顔合わせもせずに婚約だなんて強引すぎると、父に抗議したのだ。

相手が入場しているか確認してきたらどうだ、という団長の助言で侍従のもとへ向かう。

「ド・ヴァンドール公爵家のフェルディナン様でございますね。——はい、すでに他家のご令嬢と入場されていらっしゃいます」

きっぱりそう告げられ、わずかな期待を胸に彼を待っていた自分が滑稽に思えてきた。

それに、久しぶりに再会した団長に、こんな恥ずかしい場面を見られるなんて……

「んー、じゃあ、今夜は俺にエスコートする榮譽をお与えいただけますか? レディ・ローズ」

団長は一礼しながら、恭しく手を差し伸べた。

団長は二十六歳だけれど、こういう気遣いが自然にできるところに、器の大きさを感じてしまう。奥様が三人いらっしゃるだけあって、女性への接し方が洗練されているよね。

それに、正直、助かった。王宮舞踏会に一人で入場する度胸なんて持ち合わせていないもの。

——オストリッチ帝国、第九代カステイリヤ公爵、リカルド・カステイリヤ閣下。レディ・ローズ・ド・モンソー、ド・モンソー侯爵令嬢のご入場です。

すでに入場を終え、お酒の入ったグラスを片手に談笑していたところで高らかに宣言され、会場

中の視線が自分たちへと注がれた。

姉のアントワネットが八年前に嫁いで以来、久方ぶりに「ド・モンソー家の令嬢」が姿を見せたことで、招待客がざわめき始める。私を品定めするかのような視線は一切意に介さないけれど、思いがけない団長の出自に驚きの声が漏れてしまった。

「団長……公爵家の当主だったのですね？」

「ああ。とはいっても、家のことは弟任せだけだな。知らなかったか？ 帝国で一夫多妻制が認められるのは、公爵以上の者だけだぞ？」

「そうでしたか。団長は、言葉は少し荒くても……どこか品がありますもの。納得しました」

「ふはっ！ それはお互い様だろう？」

団長の朗らかな語り口に懐かしさを覚えながら、数か月前に交わした会話を思い出す。

私がアステリアへ帰国することを告げた時、彼はただ一言『そうか』とだけ言った。心のどこかで引き留めてほしい気持ちがなかったと言えば、嘘になる。一年間も寝食を共にしてきたのだ。紛争地帯に軍医見習いとして同行した際には、命をも委ね合った。確かな連帯意識を築けていると自負していたし、軍医としての自分の手腕を、それなりに評価してくれているとさえ思っていた。

けれど、そう感じていたのは自分だけだったようだ。あつけないほどあつさりと帰国を受け入れた団長に、私は聞かれてもいないのに王命による婚約が決まったことまで話していた。

あの時の私は、団長にどういう反応を期待していたんだろう……

回想に耽っている間にファンファーレが鳴り響き、王族によるダンスが始まった。

成人を迎えた第二王子が婚約者に選んだのは、帝国の公爵令嬢だった。仲睦まじい様子で手を取り合う二人は、政略的な縁とは思えないほどに幸せそうだ。

王族のダンスが終わると、招待客が会場の中央へと集まり始めた。早くクリス兄様を見つけてお暇しようと思っていたら、団長から破壊力抜群の顔で誘われて、一曲踊ることになった。

——最後の音がタンと鳴り終わり、一拍の静寂を置いて会場にざわめきが始まる。

「団長。お相手、ありがとうございます。まだこちらには滞在されるのでしょうか？ 騎士団の方にも顔を出しますね」

そう挨拶をして去ろうとした私を引き留めて、団長が真剣な眼差しで訊いてくる。

「ロゼ。あれから——こっちは、大丈夫か？」

「はい。今はもう、すっかり。症状も落ち着いています」

「そうか。……蒸し返したりして、悪かった」

団長は重くなった空気を払うように、「相手の男はどこにいるんだ？」と会場を見回した。

「実は、顔を存じ上げていなくて」

今度もまた破談になるだろうと思ひ、姿絵も見えていないと伝えると、さすがに呆れられた。

「家名は？」

「ド・ヴァンドゥール公の令息です」

「は？ あそこの次男といえは——」

団長は悪戯を思いついた子どものような顔つきになり、そこで言葉を止めた。

「ご存じですか？ 国防軍にお勤めの方らしいのですが」
「ああ、知ってる。……好敵手だよ」

再開した旋律にかき消されて後半の言葉が聞き取れない。そのまま流れて団長ともう一曲ダンスをすることになったけれど、先ほどからやけに絡んでくる。

「なあ、やっぱり俺のところへ嫁に来ないか？ 俺にはもう子どもが四人いるから、跡取りの心配はいらない。二人で地方を周りながらあちこち旅するのも、悪くないだろう？」

「何をおっしゃっているんですか」

笑って断ったけれど、「嫁に来ないか？」という団長の屈託ない言葉に、心が揺れたのも事実だ。背中の刀傷に、社交界での評判の悪さ。誰かに花嫁として望まれることなど、私には縁遠いと思っ
ているから。

それにしても団長、どうしてこんなに近くでささやくのかしら。確かに会話の内容は誤解を招くものだけれど、帝国語で話しているわけだし、音楽も奏でられているから他の人に聞かれる心配なんてないはずなのに。

「お断りします。あんなに優しくして美しいヴェロニカ様を差し置いて、団長と周遊の旅に出るなんて真似、絶対にできませんもの」

私はリカルド団長の第一夫人ヴェロニカ様にひとかたならぬ恩義を感じている。

あの時。世界に絶望した時。屋敷で優しく保護してくれた恩は、一生忘れない。

「確かに、ヴェロニカはよく出来た女だけどさ」

「そうですよ。団長にはもつたいないくらいの御方です。大切になさってくださいね？」

そうして今度こそトリカルド団長へ淑女の礼をすると、ホールを後にした。

久しぶりに慣れないダンスを踊って上気した肌を冷まそうと、給士係からシャンパンを受け取り、庭園が見えるバルコニーへ向かった。運動して火照った顔に、夜風が心地良い。しばらくその場で涼んでいたら、運悪く令嬢たちの包囲網につかまった。

第二王子の婚約者候補に名を連ねていた面々だ。帝国の婚約者と仲睦まじく踊る姿を見て、苛立ちを募らせているのかもしれない。

「あら、よくこんな華やかな場所に顔を出せたわね。六回も殿方に袖にされたら、普通は引退ものよ？ それで？ 今夜の標的はどなた？」

そう口火を切ったのは、私の五人目の元婚約者の、新しい婚約者だった。

「カステイリヤ公と踊るなんて、いったいどんな手管てくだを使ったのかしら？ 色目？ それとも、

ご実家の潤沢な財力？ まさか、第四夫人の座を狙っているわけじゃないでしょうね」

彼女は三年前の夜会で休憩室までリカルド団長を追いかけてきた令嬢だ。団長に頼まれて咄嗟とつさに匿かくまった。第三夫人の座を狙っていたらしいが、案の定、玉砕してみたみたい。

「男漁りをしたところで、傷、モノの貴女を娶ってくれる殿方なんていないわよ？」

「傷がある上に、子も無理だなんて。年寄りの後妻か愛人がせいぜいね。お気の毒」

胸の奥に黒い影が差す。この手の言葉だけは、うまく受け流せない。

「皆様は幸運ですわね。……羨ましいです」

「ふん。ま、貴女が私たちのことを羨ましいと思うのは、当然よね？」

「よかったですわね、醜い部分が隠れていて。外見からは、分からないですもの。ねえ？」

あえて挑発するように自分の心臓をトンと指してそう言った。言外に「貴女たちの心は醜い」と非難している。

「っ、なんですって!?」

逆上した令嬢の一人が扇を振り上げた瞬間、背後から低い声が落ちてきた。

「レディを大勢で取り囲むとは、いささか穏やかではありませんね。交ぜていただいても？」

柔らかい口調とは裏腹に、その声音は相手の抗弁を許さぬ威厳を帯びている。

彼女らは声の主を見るなり顔を青ざめさせ、蜘蛛の子を散らすようになくなった。

穏やかなロイヤルブルーの瞳のその紳士は、令嬢たちの背中を見つめながら小さくため息をついた。それから私に向き合い、「お怪我はなかったですか？」と優しく問うてきた。

「はい、大丈夫です。助けていただき、ありがとうございます」

大人しく叩かれるつもりなど微塵もなかった。けれど、騒ぎになる前に彼女たちの暴挙を止めてくれた男性へ丁寧に礼を述べ、足早にバルコニーのソファ一席へ向かった。

ソファ一をぐるりと囲むように透け感のある白いカーテンを引き、会場から自分の姿が見えないようにする。このカーテンは、人目を避けて逢瀬を愉しむために設けられたものだろうけれど。久方ぶりに向けられた悪意ある眼差しから逃れ、今はただ、一人になりたかった。婚約が撤回された

ことを知りもせず、のこのこと煌びやかな舞踏会までやってきた自分が、酷く惨めに思えた。

「綺麗に着飾って来るんじゃないかった。……私、バカみたい」

悪意ある言葉など、聞き慣れている。けれど、妊娠や出産という女性の尊厳に触れる話題にだけは、どうしても敏感になってしまう。平静を装っていたが、内心は酷く傷ついていた。私だって、愛する人と結ばれて、その人の子を産み育てる未来を夢見る、ごく普通の女性でいたい……

「やっぱりこんなところ、場違いね。公爵令息との婚約なんて、荷が重すぎる。白紙に戻ってよかったのよ」

そう自分に言い聞かせながら、ハイヒールを脱いで裸足になった。大理石のひんやりとした感触が、素足になんとも言えない解放感を与えてくれる。遠くからお喋りに興じる人々の楽しそうな声が聞こえてきて、ふと中庭に視線を移すと、グループで歓談している様子が見えた。十四歳で帝国へ居を移した私には、あんなふうに時を忘れて談笑できる友人が王国にはいない。

「楽しそう。……やっぱり、帝国に戻った方がいいのかしら。王国には、居場所がない……」

そういえば、先ほどの紳士は誰だったんだろう。ああして庇ってもらったのは、十三歳の時のお茶会以来かもしれない。母と参加したお茶会で、例のごとく陰口を叩かれていた時、ご婦人たちを厳しく叱責して私を守ってくれた女性がいた。私が憧れる女性像となったそのご婦人も、今となっては誰なのか思い出せない。ただ、意思の強さを眼差しに宿した女性であったことだけは覚えている。

「ふふっ、懐かしいわね」

シャンパンで喉を潤しながら、遠くに連なる雄大な山脈を眺めていた。気持ちの良い夜風が吹き

込み、白いカーテンをふわりと揺らす。何気なくそちらへ視線を向けると、カーテン越しに大きな人影が見えて、思わず息を呑んだ。

一切、気配を感じなかった。いつからそこに――

「どなたかお探しでしたら、ここには私しかおりませんが」

カーテンを少しだけ開き、慎重に顔を覗かせながら声をかけた。

立っていたのは、そこにいるだけで空気を変えるような威厳を纏った男性だった。右手で髪を後ろに流す仕草が、どこかきこえない。気まずげに伏せられた長い睫毛が目元に影を落とし、謎めいた雰囲気を放っている。

「あの……大丈夫ですか？ どこかお具合でも？」

「いや。カーテンを開けてもらっても、いいだろうか」

「え……？」

「……ドゥールだ」

ちょうどその時、中断していた音楽が再び流れ始め、ようやく発したその声も半ばかき消されてしまった。その低音の響きに、一瞬だけ懐かしさを感じたのは……たぶん、気のせいね。

「フェルディナン・ド・ヴァンドゥールだ」

どこかで聞いたような名前――その答えに思い至った瞬間、背筋がわずかに強張った。

まさか、婚約を辞退した当人がここへ？

困惑を押し隠しつつカーテンを開け、型どおりの挨拶をする。

裸足のままでいることに気づき、足先でハイヒールを探し当てながら、母から教わった微笑みを彼に向けた。

「今回はご縁がなかったようで。一緒にご入場された女性と、どうぞお楽しみくださいませ」

一息にそう告げて丁寧な礼をする。

これで立ち去るだろうと期待して顔を上げたけれど、彼は変わらず感情の読めない顔で私を見下ろしている。

「いや、入場のエスコートは――」

彼が何か言いかけた時、一人の女性が割り込んできた。

「フェルディナン様！ こんなところにいらしたのですか？ あら……嫌だ。場違いな方が、泥棒猫のように紛れ込んでいるみたいですよ」

媚びを含んだ甘い声を出しながら、私を睨んで牽制することだけは忘れない。

器用なものね。どうすればそんなふう顔の筋肉を自在に動かせるのかしら？ 彼女を真似て表情筋を動かしてみたところで、足元に温もりを感じた。

そこで屈み込むと、子猫がすり寄ってきた。

「あなたのことだったのね？ 美人さんなのに、泥棒猫だなんて。ご飯を盗んできちゃったの？ ふふっ。王宮のお料理はどれも美味しかったでしょう？」

女性が「鈍いわね」と顔を引き寄せ、令息はふっと口角を上げて、「天然だな」とつぶやいた。釈然としない気分だけど、ダンスの再開を告げる音楽に人が再び集まり始めている。

こうしてはいられない。早く退散しなくては。

改めて令息へ別れの挨拶をすると、子猫を腕に乗せたままバルコニーから庭園へと通じる階段を降りた。会場を横切って、また令嬢たちに絡まれるのはごめんだもの。

「おかしいわね、この辺りだったと思うのだけれど。灯りが少ないわ」

三年前、デビュタントの夜にあの近衛兵が教えてくれた近道を通ったつもりだったけれど、道を間違えたのかもしれない。人の気配はあるのに姿が見えないことにも違和感がある。暗がりを目を凝らしたその時、植え込みの陰から軽薄な笑みを浮かべた男性が姿を現した。

「これは美しいご令嬢だ。今宵は、私と一緒に愉しませませんか？」

「いえ。もう帰るところです」

「ご冗談を。ここがどういう場所が知らずに来たとても？ さあ、ほら」

男性が無遠慮に距離を詰めてきたせいも、それとも私の苛立ちを感じ取ったのか、子猫が腕の中からピョンと飛び降りてしまった。シャンパンのせいもあり、軍隊という男性社会で鍛えられた素の自分が顔を出す。咄嗟に周囲を見回し、逃げ道を確認しながら攻撃の手順について頭を巡らせたその瞬間、背中に思いがけない体温を感じて横に飛びのいた。

「彼女は私の婚約者だ」

頭上から低音の音が響き、驚いて振り返ると令息が立っていた。

まただ。どうしてこの人は、気配を全く悟らせないのであるか……

それに——発する言葉は短いのに、彼がいるだけで空気がピンと張り詰める。

私に話しかけてきた男性が、言い訳めいたことを口にし始めた。

「彼女に近づくのであれば、それ相応の覚悟を持っていただきたい」

令息の一言で、男性は後ずさりしつつ慌てて踵を返し、闇の中へと姿を消した。

「ここは男女が逢引に使う場だ。場所を移すぞ」

彼はそう告げるなり、私の肩を抱いて無言のまま先ほどのバルコニーまで戻っていく。表情は変わらないのに、片眉だけがわずかに上がっている。表情は変

怒っているのかしら……まさかね。

ようやく肩に回した腕を降ろした彼に、婚約は白紙に戻ったのではないかと尋ねると、即座に否定された。

「え……ですが、わたくしが提示した条件についてのお返事がまだ……」

声が裏返りそうになるのを必死に抑える。彼の瞳が明らかに剣呑な光を宿したからだ。

「その日のうちに侯爵へ承諾の返事をしたが？」

静かすぎる声の奥に怒りが潜んでいるような気がして、背中がヒヤリとする。

先日、彼宛てに送った手紙の内容が脳裏に浮かぶ。

一、背中に刀傷痕があること。

二、妊娠・出産に関する機能に障害が生じる可能性があること。

三、学業と仕事を優先すること。

——これらを承諾してくれなければ婚約は結べない、と。

彼の生家は、代々国防の任を果たしてきた由緒ある公爵家。次男とはいえ、軍人である彼が後継者になる可能性も十分にある。なのに、まさか即日承諾していたなんて。

再び音楽が奏でられると、彼は会場へと視線を向けた。

「気乗りしないかもしれないが、婚約する以上は踊っておかねば、周囲に示しがつかない」
そう言って、手を差し出してくる。

気が進まないのなら、踊らなくてもいいのに。

形式を重んじるのは、公爵令息としての責務ゆえか。それとも、彼自身の性格がそうなのかしら。この若さで副將軍を務めるほどの方だもの……そう思案しているうちに、強引に手を引かれて会場の中央まで連れ出された。

観念して片足を後ろに引き、膝を軽く曲げてドレスを持ち上げながら、優雅に頭を下げる。差し出された手を受け取り、改めて彼の顔を仰ぎ見た。

意思の強さを感じさせる眉に、筋の通った高い鼻。真っ直ぐに結ばれ、キリリと閉じた唇。見る者の心を射貫く、深い海を思わせるコバルトブルーの瞳。整えたダークグレーの髪と、度量の広さを感じさせる形の良い額。

そして服越しにも伝わる引き締まった肉体と、揺るぎない自信と余裕を感じさせる堂々たる立ち居振る舞い。その姿は、若くして「將軍」と呼ばれるに相応しい威厳と風格を備えていた。

「カステイリヤ公とは、ずいぶん親しげだったな」

「上官でしたので」

「続けて踊るほど親しい間柄、というわけか」

踊りながら問う彼の声に若干の苛立ちが含まれているように感じ、つい深い碧色の瞳を見つめる。同じ相手と続けて踊ることの意味を知らないのか、と問われ、首を傾げて「知りません」と答える。彼は深くため息をつく、二回以上連続で同じ相手と踊るのは夫婦や婚約者、恋人に限られるのだと懇々と説明した。

そういえば団長、悪戯っ子めいた笑みを浮かべていたような……まさか、知っていたの？

「今後は家名を損なう行動は慎むことだ。社交界には暗黙のルールがある。留学していたから知らなかった、では通用しないぞ」

「ごもつともです。ところで令息。自ら誘った舞踏会で、初対面の婚約者を放置して他のご令嬢と入場することは、この国の礼節に反しないのですね。後学のために、よく覚えておきます」

敵しい言葉をぶつけられようと、私は顔を上げ、胸を張り、相手の瞳を捉えたまま離さない。

弱気な態度で隙を見せると、すぐに悪意ある者の標的になることを、私は身をもって知っている。「それは……すまなかったと思っっている。緊急の用件で呼び止められ、不可抗力で——」

「真実はそうなのでしよう。ですが放置されたこともまた事実。非常識さは互角ですわね」
その言葉に彼が瞳を揺らした気がした。

「だがしかし、声ぐらいかけられなかったのか」

顔を知らぬ相手にどう声をかけるといのかと質すと、姿絵を見ていないのかと驚かれた。「見たところで無意味でしょう？ 大切なのは中身なのに。姿絵じゃ、確認できませんもの」

彼は露骨にため息をつき、「婚約を結ぶ覚悟はできていないようだな」と言い放った。

「私は、医師として生きていきます。令息の婚約者という立場など、両親が私の結婚を諦めるまでの隠れ蓑にすぎません。一時しのぎの、仮面です」

「だったら家名など捨て去って、自力で自由に生きていけ。悲運の主人公ぶるのは結構だが、相手も貴重な時間を棒に振ることになるんだ。今までだって、そうだっただろう？ 職業を理由に責務を果たさないとこのなら、貴族の肩書もただの仮面だな」

「それは……」

胸にチクリとした痛みが走る。それでも俯くわけにはいかない。

「まあ貴女には、リカルド殿の求婚を受け入れて帝国へ戻る選択肢もあるようだが」

まさか、あの会話を？ オストリッチ語を完璧に修得していないと理解できないはずなのに。

「盗み聞きなんて、悪趣味ですね」

「帝国語で話していれば問題ないと思っただか？ 貴女を貶めようとする輩は、そういう油断を見逃さない。自分の立場を全く理解していないようだが——それは貴族令嬢として、致命的だ」

彼は唇をキュッと一文字に結んだまま、感情の読めない冷めた表情で巧みに私をリードする。

王命により婚約を命じられた、礼儀知らずな小娘。それも、不名誉な婚約破棄を六度も繰り返してきた悪名高き令嬢。加えて、他国の既婚男性と二回連続でダンスをするような非常識ぶり。

そんな相手と踊らざるを得ない屈辱。

彼の無表情は、そんな私に対する苛立ちを隠すための仮面なのだろう。

なのに——私をリードする彼の動きは、どこまでも丁寧で、優しい。

どうせならぞんざいに扱ってくれたらいいのに。悔しいけれど……大人なんだわ、彼は。

「そんな顔をするな。あらぬ誤解を招くだろう？」

「でしたら、その射貫くような眼差しで私を睨むのもやめてください」

「睨んでなどいないだろう？ 皆が注目しているんだ。なんとか表情を繕えんのか？」

「その言葉、そのままお返しいたします」

カステイリヤ公とは楽しそうに踊っていた、と言う彼に、「団長とは背中を預け合った仲ですもの」と返す。続けて「令息も軍人なら、その意味が分かるでしょう？」と。

「……帝国では、医学生を戦地に送るのか？」

途端に彼の声が一段低くなり、自分の失言に気がついた。

内心の焦りで重心が揺らぎ、バランスを崩しかけた瞬間、彼の腕が力強く私を受け止めた。

互いの鼓動が重なるほどの近さに戸惑い、両手で彼の胸を押して距離を取る。込み上げる感情をなんとか抑えて二度目のダンスを終えた。

「次の演奏まで時間が空くはずだから」

彼はそう言い残し、飲み物を取りに行った。

先ほどの失言を追及されなかったことに安堵して、ふと周りを見回すと、若い令嬢たちが美しく着飾り、咲き誇る前の蕾のような瑞々しさと輝きを放っていた。

——ん？

背中に視線が刺さる。誰かしら、と振り向くと——華やかな顔立ちをした令嬢が立っていた。可愛らしいパステルカラーのドレス。年の頃は私と同じくらいだろう。彼女は飲み物を手にした令息のもとへ駆け寄ると、彼の腕に手を添えて甘えるように話しかけた。

令息も、私に対する態度とは打って変わって紳士然と対応している。

「ああいう振る舞いもできるのね……お互い、最悪の初対面になつてしまったわ」

そんなことを思いながら二人の様子を観察していたら、八時の方向からの視線に気づいた。煽るような気配——訓練で身につけた感覚が、わずかな危険の匂いを告げていた。

視線の先、大勢の殿方に囲まれた妖艶な美女が真つ直ぐに私を射貫いている。

敵認定には至らないが、警戒対象には入つたようだ。

歳の頃は二十代半ばか。しつとりと潤つた黒髪に、王国ではあまり見かけないエキゾチックな顔立ち。豊満な胸に、くびれた腰。私と同じスレンダーなロングドレスを堂々と着こなしている。

彼女は私と目が合うと、口角を上げて余裕のある、そしてどこか挑発的な笑みを浮かべた。

口元は弧を描いているけれど、瞳の奥は冷えている。

——人を値踏みする笑み。見慣れた風景ね。

そう思いつつ、母から教え込まれた微笑で応じた。

ようやく少女から解放されてこちらに向かつていた令息を、彼の女性が呼び止める。

「閣下。ペルナンドの地では愉しい夜をご一緒でき、大変光栄でございました。遠征の際は——」
わざと私に聞かせるような艶っぽい声。

無自覚なのだろうけれど、彼は戦う男の危険な色気を纏っている。彼女との関係性は分からない。でも、この二人が惹かれ合うのは理解できる気がする。

「私に対する牽制、つてわけね。割つて入つたりなどしないのに」

できるだけ自然に見えるように踵を返し、彼らに背を向けて先ほどのバルコニーへと戻った。

令息は、女性に人気なのね。『愉しい夜』……あれほど自制心の強そうな彼でも、魅力的な美女には心が傾くらしい。二十四歳だもの、そういう人がいて当然か。

二人の色香にあてられたのか、身体が火照り、ひどく喉が渇く。

少し、落ち着こう。

幸い、先ほど口をつけたシャンパンがテーブルに残っていた。グラスへと手を伸ばしたその時、厚みのある大きな手が重ねられた。

「口をつけない方がいい」

どうして？ 毒が入られているとでも？ それより、彼女を置いてきて大丈夫なの？

疑問符を浮かべている私へ、彼が透明の液体が入ったグラスを差し出した。

「果実水だ。酔いを冷ませ」

「……ありがとうございます」

私がお酒を口にしてしまうと、どうして分かつたのかしら。

「誰がグラスに触れたか分からない。こういうのは、用心した方がいい」

「そう、ですわね」

陰謀渦巻く社交界において、嫉妬も裏切りも日常茶飯事。微笑みの裏に牙を隠し持つのが貴族の嗜みと言わんばかりに、誰もが当然のようにそれをやってのける。私も名のある家の娘だというのに。帰国した安心感から、気が緩んでいた。

情けなさに唇をきつく噛みしめ、視線を落としたその時――

「先ほどは、言いすぎた」

俯いた私の頭上から、そんな言葉が降ってきた。

「いえ。大切なことを教えていただいたと、感謝しています」

そう言葉を返した瞬間、彼の指先が私の顎に触れ、顔を少し持ち上げた。視線だけを上げると、わずかに眉尻を下げた彼がそこにいた。

「噛むな、傷になる。……綺麗にしているのに」

親指の腹で下唇の端をそつと撫でられ、鼓動が速くなる。

やめてほしいのに、なぜか拒めない。

本音を言うと、優しくなんてしないでほしい。冷たく突き放してくれたら、彼の非道さを責めて自分の至らなさから目を逸らすこともできるのに。そうはさせてくれない彼の言動は、心なしか兄姉のそれと重なる。厳しさはあるけれど、敵意も悪意も混じっていない。

「先ほどの女性とは、貴女が不快に思うような関係じゃない」

「気にしていません」

「ふつ、ならいいが。――過去の女性関係は清算済みだ。貴女が気に病むことは何もない」

歳若い令嬢ならば、年上の婚約者の女性遍歴は気になるところだろう。

けれど、私の中身は婚約者までいた二十七歳の女性だ。健全な成人男性なら過去関係のあった女性がいて当然だし、それを知って動揺することもない。

むしろ、未だにリヨウのことを忘れられない自分の方が不誠実かもしれない。前世とはいえ、彼に対する気持ちも、一緒に過ごした日々の記憶も、しっかりと心に刻まれているのだから。

――相手も貴重な時間を棒に振ることになるんだ。今までだって、そうだっただろう。

先ほど告げられた言葉が、心の中でこだまする。

私の覚悟が足りないせいで、今度は令息の人生を振り回してしまうのだろうか。

不本意な王命という形で。

それだけは、避けたい。だから、彼にお願いしてみることにした。

「結婚後に『貴女を愛することはない』だの、『貴女を抱く気にはなれない』だのと言われるくらいなら、婚約を解消することを前提に自由恋愛を認めてくれませんか？ もちろん、令息も自由に恋愛してくださって構いませんから」

「王命で婚約しておいて、自由恋愛が認められるはずないだろう？ まったく、どこまで……」

彼は眉間を指で押さえ、目を閉じた。

そんなに呆れなくても。貴方だって、私と結婚する気などないでしょうに。

「そもそも、この婚約は令息に利がないでしょう？」

「陰口などものともせず毅然と胸を張り、崇高な志を持って自立する。己の身を守れるほど武術

に長け、心遣たましく美しい。……利しかないと思うがな？」

なおも言葉が続けようとする彼を、私は片手をかざして制止し、真剣な面持ちで碧い瞳を正面から見つめた。

「私が聞きたいのは、令息の本心です」

数秒の沈黙の後、彼は額から手を放し、静かに口を開いた。

「私には、忘れられない女性がいる。だが、周囲は早く身を固めろとうるさい。王命を機に、そろそろ区切りをつけるのも良いかと思った」

嘘偽りを述べているようには思えない彼の瞳を見ていたら、不意にリヨウの顔が浮かんだ。

「その女性とは、一緒になれないのですか？」

「ああ。どうも、叶わなさそうだ」

彼はそう言つて、遠くに目をやった。存在しない何かを見つめる彼の横顔に、ふと自分の姿が重なる。彼もまた、忘れ得ぬ人への想いを胸に抱きながら生きてきたのだとしたら……まるで自分に言い聞かせるみたいに、彼に尋ねた。

「心に無理を強しいてまで、前に進もうとしなくてもいいのではないですか？」

「生憎あいにく、いつまでもそれが許される立場ではないんだ」

「そう……ですか」

前に進もうとしている彼の姿に、眩くらしさとほんの少しの落胆を感じる。同朋だと思つたのも束の間、私だけが置いてきぼりにされたような感覚に襲われた。

「でしたら——婚約の期限を決めませんか？ それまでに令息が想い人と一緒になるか、お互いに信頼や愛情を築けそうにない相手だと結論づけたら婚約を解消する、というのは？」

「貴女はそれでいいのか？」

「私は、愛する人と結婚して、幸せな家庭を築きたいんです。七回目の婚約が解消されたところで記録が一つ増えるだけ。……もう驚く人もいません」

「……誰か、心に決めた男でも？」

「その方との結婚は……叶わぬ夢になりました」

雲ひとつない真夏の夜空に浮かぶ三日月を見つめながら、独り言のようにそう答えた。

彼が驚きの目で私の横顔を見つめていたのは気配で分かったけれど、あえて視線は向けなかった。だから彼がどういふ表情をしていたかまでは、分からない。

軽蔑か、呆れか、はたまた嫉妬——それはあり得ないわね。ま、どう思われても構わない。

しばらく夜風に吹かれていたら、「疲れたんじゃないか」と訊かれ、ソファアへと座らされた。

「右の踵かかとを診みせてみる。さつきから気にしているだろう？ 痛むんじゃないのか？」

実は、先ほどから右足の踵がヒリヒリしている。慣れないヒールで四度もダンスを踊ったのだから無理もない。彼が床に片膝をつき、立てた方の膝に踵を乗せろと言ってくる。

「手当なら自分で行います」

「婚約者なんだ。素足を見せても問題ない。……擦りむいているな。少ししみるぞ？」

「こういった手当、慣れてらっしゃるんですね」

「ん？ 仕事柄、怪我はつきものだからな。まあ、こういうのは貴女の方が上手だろうが」
自分について知ってくれているのが意外で、胸がこそばゆくなった。

これまでの婚約者は、私が医学を学んでいることに無関心か、変な対抗意識を持って嫌味を言うかのどちらかだった。

「こういうの、久しぶりです。子どもの頃に戻ったみたいで……ふふっ、嬉しい」

「嬉しいか？」

「はい。昔、兄や姉たちに、よくこうして手当してもらってました」

彼は小さく笑うと、「お転婆てんぱだったんだろうな」と言つて、そつと足をハイヒールへ戻した。

なんだろう。この人は、ともすると冷徹で他人の感情に無関心な印象を与えるけれど、芯に優しさを持っている気がする。それに、もう触れられることに抵抗を感じない。

お料理をつまみながら舞踏会を眺めていると、会場のどこかでワツと大きな歓声が上がった。

「楽しそう……」

「もうすぐ社交シーズンが終わるからな。別れを惜しんで話が弾んでいるんだろう」

「令息も、ご友人たちとはお話しできましたか？」

彼は短く「ああ」とだけ答えると、会場へ視線を向けたままこう言った。

「王国に居場所がないのなら、これから作っていけばいいだろう？ 貴女が居場所を作る、その足がかりくらいにはなつてやる」

もしかして、あの独り言を聞かれていたの？ だとしても、どうしてこんな優しい言葉をかけて

くれるんだろう。初対面なのに。意地悪なことばかり言うのに。

気がつけば、心がふつと温かくなっていた。

帰りは、公爵家の馬車で庶民街に借りているアパルトマンまで送ってもらうことになった。

噴水広場に着いて起こされると、なぜか向かいに座っていたはずの令息が隣に腰かけている。

「もしかして、肩を貸してくれたんですか？」

「あんな寝方をしたら、首を痛めるぞ。それに、『寝てもいい』とは言ったが、本当に寝るか？」

初対面の男性の前で無防備な姿を晒さらすなど、普段なら絶対にしないのに。この人は信頼できると、直感的にそう思ってしまった。そんなこと、とても彼には言えないけれど。

「抱えるぞ」

彼の手を借りて馬車から降りるなり、ふわりと足が宙を舞う。

「歩けますから、降ろしてください」

「貴女は見えていて危なっかしいんだ。少しの間だから、我慢してくれ」

どうしてこんなことになったのか、状況判断が追いつかない。

彼が纏まとうシダターのスパイシーな香りに包まれるたび、落ち着きを奪われる。

「ここです」

「——薬局？」

ようやく辿り着いたアパルトマンは、王都一の薬師と名高いユベール博士が経営する薬局薬局の二階

にある。

「ただいま」

「ロゼ、おかえり。今日はまた一段と綺麗だわね。あら、恋人？ いいわねえ、恋する乙女！」
博士は私たちに向かってパチンとウインクをすると、鼻歌を口ずさみながら研究室へと消えた。

「えっと、今のは薬局のオーナーのユベール博士です。少し个性的ですが、薬師としてはすごく優秀な方なんです。あははは……は」

彼の目が笑っていない。眉間の皺しじわが険しさを増している。

もしかして、男と同居する阿婆あば擦れすずれとでも思われているのかしら。

「彼もここに住んでいるのか？」

「はい。この薬局のオーナーですから」

「なるほど。これは急いだ方が良さそうだな」

彼が顎を触りつつ、謎めいた言葉をつぶやく。

「ですが、ユベール博士の心は女性ですから。そう、い、う、過あやまちはあり得ません」

なんとなく彼が不機嫌な理由がそこにあるように思えて、急いで補足した。

「ん？ 『そ、う、い、う、過あやまち』とはっ」

彼が急にその整った顔を私の鼻先まで近づけて瞳を覗き込んでくるものだから、情けないことに動揺してしまふ。

「くくくつ。すまない、からかった。——噂と違って、男慣れしてないんだな」

「令息って、時々すごく意地悪です。……兄様たちみたい」

途端に苦虫を噛み潰したような顔をする。私、何か失礼なことを言ったかしら。

「二階の部屋は安全なのか？」

「はい。各部屋にも鍵はありますし、父がつけた影に監視……護衛されている気がしますので」

彼は特別驚いたふうでもなく、「ああ」とどこか納得したように頷くと、「一応、防犯上の問題がないか確認させてくれ」と言うので、二階の自室へと案内した。

「ここで生活を？」

十七平米ほどのこの部屋は、公爵家の化粧室くらいの大きさだろう。けれど、洋服や書物を収納する棚に、書き物をする机と椅子、それにベッドが備わっていて十分快適だ。彼はあちこち壁を叩いたり、窓から外を覗いたりして周囲の安全を確認している。

「隣には誰が住んでいるんだ？」

「今は空室で、来月から医学アカデミーの同級生が引っ越してくる予定です。右端の部屋はユベール博士が使っています」

「ふん……」

顎に当てた指が、何かを思案するように動いていた。そして決意を固めたように、こう言った。

「次の休みに遣いをやるから、公爵家のタウンハウスまで来てほしい」

それだけ告げると、迷いのない足取りで帰っていった。一切の無駄のないその動きに、どこか見覚えがある気がした。

けれど、結局思い出せないまま睡魔に襲われた。

次の休日。

令息が自ら薬局まで迎えに来てくれた。タウンハウスまでは、馬車で十五分ほどだという。

「貴女のアーストネームはジョゼフィーヌだろう？ なぜミドルネームで呼ばれているんだ？」

「十二の頃、背中に大怪我を負いまして。その後は縁起を担いでか、ローズがファーストネームみたいに使われるようになったんです」

「呼ばれる名が変わった時は、驚いただろう？」

「それが、事故の後遺症でそれより前の記憶がすっぽり抜け落ちてしまっただけ」

今思い返せば、あの頃の私は、必死だった。

幸い、前世の記憶——年齢に不相応なほどの医学と薬学の知識——は残っていたので、『傷物令嬢』などと揶揄され始めるなり婚活戦線から離脱し、オストリッチ帝国の医学校へ入学した。

ちやうどクリス兄様が外交官として帝国に駐在していたし、北との大戦で国内情勢が不安定な時期だったから、両親は比較的すんなりと留学を許してくれた。

「大変だったな」

令息の声が一段低くなった。

そんな反応を引き出すつもりではなかったから、あえて明るい口調で言葉を続ける。

「そうでもないです。背中痛みを緩和させたいと言ったら、ユベール博士を紹介してもらえて。

元々習っていた武術も、身を守るためだと言えば、続けさせてもらえました。留学だって——」

身の上話をしているうちに公爵家のタウンハウスに到着した。手入れの行き届いた見事な庭園には、色とりどりの草花が咲き誇っている。

この景色、どこかで見たような気がする。いつだったかしら……

「そういえば、ティボーが世話になったな。丁重にもてなしてくれたと聞いている」

「当然のおもてなしをしたまです。それに、ティボー様とのお話は楽しかったですよ？」

彼がふっ、と嬉しそうに口角を上げて「そうか」と頷く。

ティボーは令息が住む別邸の執事で、舞踏会の招待状を手実家へ来てくれたのだ。ドレスを贈りたいとの申し出に、であればその費用を令息の支持する団体へ寄付してほしいと伝えた。後日、私が運営のお手伝いをしている団体に匿名で多額の寄付金が寄せられたけれど、あれはたぶん、令息だったのだろう。本当に寄付してくれるなんて。

公爵家本邸の玄関には、二十人を超える使用人たちが並んでいた。これでも自身の悪名高さは自覚している。つい身構えた私を、彼らは拍子抜けするほど温かく迎え入れてくれた。

「婚約者のレディ・ローズだ。近々隣の別邸へ越してこられる。みんな、よろしく頼む」

婚約者？ それに、引越すなんて話は初耳だ。彼の意図が掴めなくて胸がざわつき始める。

それでも表情を崩さずに笑顔で挨拶を交わすと、彼のご両親が戻るまでの間、二人で婚約の条件を詰めることにした。箇条書きにした書類をスッと令息の前に差し出す。

「まずは貴女の要望からだが。——傷痕のことなら承知している。何も問題はない」

「そうは言いましても、跡継ぎの問題は重要でしょう？ 事前に公爵家が信頼する医師の診断を受けます。婚約を結ぶかどうかは、その結果を——」

彼は最後まで聞くことなく、「必要ない」と言った。

貴女のかかりつけ医は妊娠・出産の機能に問題はないと診断しているのだし、不妊の原因が女性側にあるとは限らないのだから、と。彼の兄夫婦は、子を授かるまで四年かかったという。

「婚約者や妻としての役割……これも案ずる必要はない。もとより私は次男だ。家は兄が継ぐ。貴女は私のパートナーとして必要最低限の社交をしてくれたら、それでいい」

「あの……」

「なんだ？」

後から幻滅されても困るので、初めから打ち明けておくことにした。

「私、令嬢らしいことは何もできません。音痴だし、楽器も弾けないし、お茶会を開いたことも……」
言いながら声が細っていく。

「くくくつ。いつそ清々しいな。別にそういうことを求めているわけじゃない。普通の令嬢にはできないことが貴女にはできるのだから、胸を張ってればいい」

「そうなんです。私、掃除、洗濯、料理は一通りできますし、場所を選ばず眠れるので、夜勤中は重宝しています」

「そういう意味ではないんだが」

彼は口角をわずかに上げると、「一応言っておくが、寝る場所は選んだ方がいい」と忠告してきた。

「もっと女性としての自覚を持って」と言われても、警戒心は強い方だ。そう返すと、「だったら男に馬車で送ってもらっても眠るなよ？ 送り狼の可能性もあるんだからな」と諭された。

送り狼……妖怪の名前しか思い浮かばない。令息がそういうことを言うとは意外だ。

「何か勘違いしているようだが。とにかく、男には用心しろ。いいな？ ——次に、従軍したら婚約解消？ 新しい項目だな。まあ、異論はない。ただし、婚後の従軍は控えてもらう」

思わず目を見開いた。

「当たり前だろう？ 私の子を宿している可能性のある女性を戦場へ送るわけにはいかない」

私とそういう関係になるということ？ そもそも私たち、婚約解消が前提のはず……
腕組みをして考え込んでいたら、「なんだこれは」という彼の声ではっと我に返った。

「朝晩のお見送り、お迎え時と就寝前にハグをする……こんな項目、以前にはなかっただろう？」
正直にお酒を飲んだノリで加えた項目だなんて伝えたら、叱責されそうだ。

「実家ではそうしておりますの。令息も做っていただければ」

理解しがたいといった雰囲気、「これはいらんだろう」とつぶやく彼に、であれば婚約はなかったことに伝えると、「善処する」と返された。

「ええ!？」

「なぜ驚く？ 貴女の要望だろう?」

まさか、こんなふざけた条件を呑むなんて。想定外の事態だわ。

「次に私からの要望だが——結婚するまでの間、貴女には私の屋敷で一緒に暮らしてもらう」

「はい？」

「葉局よりここからの方が学校に近いだろう？ それに、貴女が言っていた、信頼し、愛し合える関係になれるかどうかを確認するためには、共に暮らすのが一番だと思ってる」

「それはそうですけど……」

未婚の男女が、一つ屋根の下で暮らしてもいいものなのかしら？

公爵家は、伝統と慣例を重んじる家柄のはず。

でも——確かに彼の言っていることは理にかなっている。王都の中心にある彼のお屋敷に住むとなると、学校にも職場にも近くて助かる。卒業と同時に七回目の婚約も破談に終われば、さすがの両親も私の縁談を諦めるだろう。そして令息はその間、女除けをしつつ想い人と一緒になれる道を探ることができる。

意外とこの婚約、互いに利があるのかもしれない。そう思えば、悪くない話だ。

こうして、私たちは婚約を結ぶことに合意し、早々に私が彼の住む別邸へ引越すことで話が進んだ。

本邸の家令が差し出した婚約契約書に、まずは彼が署名した。

迷いのないその手つきに、こういう時でさえ隙がないのだと感心する。

次に自分の番となり、初めて事の重大さを実感した。思わず万年筆を持つ手を止めた私を見て、令息が紅茶のお代わりを頼んでくれた。

これほど想いを込めて、自分の名を刻んだことはない。不思議と背筋が伸びる思いだった。

「書類はこれでいいな。——両親が戻ってきたようだから、家族を紹介する。ついて来てくれ」
彼に誘われて外へ出ると、優雅なアーチ型の屋根が美しい、ガラス張りの温室が目を引いた。

あれは……

胸の奥で眠っていた記憶が、音もなく蘇る。

帝国へ留学する前の頃。母に伴われ、とあるお茶会に参加したことがあった。ちょうど第二王子の婚約者選びが始まり、王子に謁見した母娘がお喋りに花を咲かせている様子を、私はただ一人離れた場所から眺めていた。あの頃は、どこへ行っても見下されるか、あわれ憐みの視線を向けられるかだった。まさか、逃げ込んだ温室でご婦人たちの悪意に晒されるなんて思いもしなかったけれど。

「大丈夫か？ 上の空のようだが」

「すみません。少し、昔を思い出してしまつて。温室があるんですね」

「ああ、母の趣味でな。南国の植物や貴重な薬草を育てている」

「薬草ですか？」

「ふつ。興味があることにはすぐ反応するんだな。——あれが父だ」

視線の先にいたのは、二十年後の彼を思わせるような男性だった。無駄な贅肉ぜいたくひとつない引き締まった身体つきは、まるで現役の軍人のような鋭さを放っている。深みのある上質なシャツを優雅に着こなしたヴァンドゥール公マクシミリアンは、「よく来てくれた」と私をいた労わり、家族を一人ずつ紹介してくれた。

「妻のヴィクトワールだ」